

浮世草子における『琅邪代醉編』利用

——『和漢乗合船』『好色敗毒散』——

神谷勝広

はじめに

明の張鼎思が編纂した『琅邪代醉編』（ろうやだいすいへん、『瑯邪代醉編』とも表記する）四十巻は、さまざまな漢籍から文章を集積しテーマごとに分類した類書である。^①延宝三年（一六七五）に和刻もされている。したがって、江戸期には相当に流布したと推測できる。ところが、近世小説研究史上、『琅邪代醉編』との関連に言及されたことはないのではないか。

『琅邪代醉編』の書名はいくつかの近世小説の中で見出せる。たとえば、明和七年（一七七〇）刊の黒本『近江国犬神物語』（鳥居清経画）には、

ろうやたいすいのへんにいわく、それきよくおのれにあるのそ
うをもついで、むしんのしゆそをせんとほつす、じやせいを

かさずしをうると、むべなり

とあり、『琅邪代醉編』巻二十一に対応する部分が見える。また、

曲亭馬琴『南総里見八犬伝』（文化十一年〔一八一四〕刊、以後二十九年間に渡り刊行）百七十八回下に、

瑯邪代醉編に、阿耨多羅を、等見の義と注し、三貌三菩提を、
成正覚とす……

の文章がある。^③これも該当する部分が『琅邪代醉編』巻三十二に存在する。これらに関して直接的な関連であるか否か、また書名を示さずに利用している箇所が他にも存在するの否かなどは、各専門の方々へ検証を委ねたい。

稿者は、浮世草子二作品——『和漢乗合船』『好色敗毒散』——を取り扱い、『琅邪代醉編』との直接的な関わりを証明した上で、両作における利用法、およびその差異を述べる。

一 『和漢乗合船』

落月堂操扈『和漢乗合船』（正徳三年（二七一三）刊）は、全十二話に怪談・奇談を集めた浮世草子である。まず日本を舞台にした話があり、その後に「朝鮮の学士李東郭云」として中国説話を中心例話をあげる。そこで取りあげられた例話の出典は、次のようなものであるが、『琅邪代酔編』（以下、『代酔編』とする）も巻五の一に含まれている。

- 巻一の一 『遼齊問覽』
- 巻一の一 『大槐宮記』
- 巻二の一 『清尊録』
- 巻二の一 『文徳実録』 『今昔物語』 『杜陽編』 『仙伝拾遺』
- 巻三の一 『剪燈新話』 『愛卿伝』
- 巻三の一 『広異記』 『幽冥録』 『報応記』 『冥祥記』
- 巻四の一 『鷄林の国書』
- 巻四の一 『括異志』 『西陽雜俎』
- 巻五の一 『燕間録』 『代酔編』 『続巳編』 『聯車志』 『風俗通』
- 巻五の一 『剪燈新話』 『涓塘奇遇記』
- 巻六の一 『摺紳歴説』 『稽神録』
- 巻六の一 『鷄肋』 『鶴林玉露』 『淮南子』 『西陽雜俎』 『耳日記』

浮世草子における『琅邪代酔編』利用

『代酔編』の該当部分は、「永録六年、靈丘県の民、李文秀が妻、一産に三子をうめり、又、呉守倉といへるもの、妻、一産に三子をうめり、是等は代酔編にみへたり」と短い。確認すれば、『代酔編』巻十六の四丁裏に「永禄六年靈丘県民李文秀妻米氏一乳而生三子……呉守倉妻牛氏一産三男」とある。

普通に考えれば、『代酔編』利用はわずかに過ぎず重視しなくともよい。ところが、これは見かけに過ぎない。

『和漢乗合船』巻五の一には、『代酔編』引用の前後に、双子あるいは三つ子がらみの四つの中国説話が『燕間録』『続巳編』『聯車志』『風俗通』に基づきながら紹介されている。

何汾が燕間録に、北魏の延興三年、秀容郡といふところの女、一産に四人の男子をうめり……又よく似たる事もためしあり、むかし汝寧士燕生といふもの、妻、一産に三子をうめり、五異の陸鐘人傑、光州といふところを知行せしとき……燕生が三子の男子と皆婚礼せさせしとかや、続巳編にのせたり……又、むかし白汲といふものあり、其弟とは是も二子にて、容貌すこしもたがひなし……弟のつま、我をつとなりとあやまりて……これより白汲、弟とは衣冠をかへて、まぎれざるやうにせしとかや、宋伯象が聯車志に出たり、又、なをもおかしきことあり、ちなみにかたり聞かすべし、陳の国の張伯楷、弟の仲楷とはか

たち少もたがふことなし……兄の伯権はしりすぐるをみて我を
つとなりとあやまりおもひ、みづから今けはいをなす、かほう
つくしきにやととふ……女ふた、び大にはぢしとかや、此こと
風俗通にみへたり、兄弟二子のよく似たるをもつて、古よりみ
あやまりしこと、是らのことにてしるべし

これらの中国説話は、『代醉編』巻十六の三丁表から四丁裏にかけ
て順序は異なるが掲載されている。

學生相育

白汲与其弟學生状貌酷相肖人不能弁一日汲自外歸妻以為其夫也
迎而呼之……宋伯象睽車志

陳国張伯権与弟仲楷形貌一般仲楷娶妻新粧畢忽見伯権自窓外
走過妻問曰我今裝飾好否……婦又大愧而羞恨其兄弟状一同也
風俗通

(十三行中略)

四乳俱四

北魏延興三年秀容郡婦人一產四男……河汾燕間録

一乳三男

汝寧上燕生者妻一乳三男吾具陸鐘人傑知光州時……続巳編
原漢籍からではなく、『代醉編』に依拠して先の部分は執筆された
のである。

さて、これら例話の前にある本文は日本の話であるが、そこで双
子の兄弟が家督争いを繰り広げる。兄の平次は、

我、學生たりといへども、なんぞしかる道理あらん、二子はい
にしへよいためしを、し、むかし、殿王祖甲ふた子をもふく、
さきにむまれたるを兄として、名を鬲といひ、のちにむまれた
るを弟として、名を良となづく。又、許釐莊公、一産に二人の
女子をもふく、さきにむまれたりしは妹、のちにうまれしを笈
といふ、是もさきにむまれたるをあねとせり、そのほか、文長
情・膝公・李黎・漢霍光、これみなふた子をもちしかども、さ
きにむまれたるをもつてあにとせり、なにゆへ弟に家督をわた
すべき

といい、中国の先例を根拠に自分の正当性を主張する。この部分も
『代醉編』巻十六の一丁裏から二丁表に依拠している。

漢霍光妻生子學生疑其長光曰昔殿主相甲一産二子……以鬲為兄
良為弟許釐莊公一産二女曰妹曰笈……文長情一生二男膝公一生
二女李黎生一男二女並以前生者為長

『和漢乗合船』巻五の一は、例話だけでなく、本文の内容にも関わ
る形で『代醉編』を用いている。

しかし、『和漢乗合船』が『代醉編』と関わっているのは巻五の
一のみではなかった。巻六の一は、継母の悪心を主題とするが、二

つの例話をあげている。

まず一つは、「江南の曾思郎」という者の娘の話である。ある時、娘の鏡に不気味な女の姿が映るようになる。曾思郎が鏡の中の女に問いかけると、

我はいにしへの建昌県の録事が妾なり、御身のむすめが前生は其ときの本妻なり

と語り出し、自分は子供を生んだが、録事が留守の間に本妻に子供ともども井戸に突き落とされ、殺されたと述べる。そして、

その後御身のむすめも死せしといへども、我うらみ今にはれず、その本妻の後身として、すでに前世にての事なりといへども、なんぞ此うらみをはらさざらん

と語る。その後、

むすめは是よりやみつきて、つるにかの霊のために一命をとられしとかや、此事は摺神脛説にみへたり

とあつて終わる。

この話の後に、もう一つ幽霊の話が続く。

むかし、建安といふところのもの、つま死せしかば又後づれの女をめとり、此女、継子をにくむことはなはだしかりしか共、おつとは此女にまよひ、制することあたはず

前妻は幽霊となり、後妻を責め、もし十口のうちに、悪心が改まら

ないならば取り殺すと脅す。恐怖した夫婦は反省し、改心の誓いを立てる。その誓いによって、前妻の幽霊は去っていく。

あたりちかき栢の木の内うちへ入るとおもへば、かのゆうれいがすがたは消てうせにき、此こと徐絃が摺神録にのせたりとする。

さて、この二話は、『摺神脛説』『摺神録』に依拠したのごとく見える。だが、『代醉編』卷三十三の二十四丁裏から二十五丁表に、婦人在鏡中

江南曾思郎女一日將粧見一婦人在鏡中披髮徒跣抱一嬰兒自是日
日見之思郎自問其故云我往歲建昌縣録事娉我為側室踰年生此子
君女為正妻後録事出旁皇君女并此子投我井中以石填之詐其夫云
逃去我訟於有司適会君女卒今雖後身固當償命也其妻遂卒 摺神

脛説

前妻責後妻

建安有人妻死再娶虐前妻之子夫不能制忽見亡妻入門責後妻曰人
誰無死誰無子母之情乃虐我所生如是訴於地下与我十日誨汝汝不
改必殺汝夫妻再拜為具酒食滿十日將去責戒甚嚴拳家送入栢林中
乃不見 摺神録

と並んでいる。状況から判断して、『摺神脛説』『摺神録』ではなく『代醉編』に依拠したと見る方が自然である。

さらに、『和漢乗合船』巻六の二でも『代醉編』は関わる。この章は、敏捷な刺客や盗賊の話であったが、

朝鮮の李東郭、此ことをき、ていはく、和漢ともに、かゝる希有のものいにしへよりありとみえたり、むかし、沈光といふものあり、隋につかへて武勇早わざのほまれあり、しかるに禪定

寺にたかさ十余丈の旗竿ありしが、あるときその繩さされていかんともすべき手段なし、これ人力のをよぶべきことならずと、みなく／＼案じるところに、沈光なはをとつて口にくみかの竿をする／＼とのほり、たゞちに龍頭にのほり、とりなはをかけてのち、手足ともにみなはなちまつさかさまにとびをり、あしをそらになし手にてあゆむこと十余歩、みるものかんぜずといふことなし、世の人みな沈光を肉飛仙となづけしとぞ 趙崇 詢が鶏肋にみえたり

この沈光の逸話も『代醉編』巻十八の十二丁表に『鶏肋』から引用収録されている。

沈光

北史沈光仕隋太子勇引署学士驍捷跡弛禪定寺中幡竿高十余丈適値繩絶非人力所能及光因取索口銜拍竿而上直至龍頭繫繩畢手足皆放透空而下以掌拓地倒行十余步觀者嗟異時人号爲肉飛僊 鶏肋

また、沈光の逸話の少し後に、

これらのものを市儷とも、又は刺客又は盜俠、あるいは壁飛、あるいは肉飛仙など、なづけたり、また、むかし、斉と楚とた、かひしとき、子発、市儷をもちいて奇策をなし、斉の敵をしりぞけしこと、淮南子にいでたり

という部分もある。壁飛と呼ばれた人物は、唐の柴紹弟であるが、彼の逸話も『代醉編』巻十八の十二丁表に、沈光の逸話の次に見出せる。さらに、「子発、市儷をもちいて」云々の話も、『代醉編』巻二十八の五丁裏に『淮南子』からの引用として存在する。楚の子発は、一働きたいと市儷（盜賊）から申し出を受ける。市儷は、斉の將軍の身近な物品を盗んでは返却する。いつでも殺せるぞという脅しである。これによって、斉の將軍は恐怖に襲われ、全軍に退却を命じてしまう。一人の將軍を暗殺するのではなく、一人の將軍に恐怖感を与えることで、敵の全軍を退かせる。『和漢乗合船』がいう奇策はこれを指すのであろう。

『和漢乗合船』は、『代醉編』の書名を一箇所しかあげない。そのまま受け取れば、わずかな利用と判断してしまう。だが、実際には多くの箇所―表向き、『燕間録』『続巳編』『睽車志』『風俗通』『摺神勝説』『稽神録』『鶏肋』『鶴林玉露』『淮南子』『西陽雜俎』『耳日記』とあつた箇所―で用いていた。

しかし、なぜ見てもいない漢籍の書名をわざわざ示すのか。この点については、拙稿「都の錦の学識と手法」（『近世文芸』五十五号平成四年一月）で近似した事例を取りあげたことがある。都の錦は、『御前於伽』（元禄十四年（一七〇二）刊）の中で、

我等も柔成事が好ぬれども、今の時を考るに、凡夫の心粹過て、茶屋の久三、中衆の茂助まで、仁義といへる名をとなへ、粘壳姥にいたる迄、論語よまずといへばいふ、しかれば当世をしなへて、生物知の人心なれば、やわらかなる中にも又ちんふんかんをくわへねば、中々合点しをらぬよつて、われ弁を好にあらねども、やむ事を得ざれば也

という^⑤。当時既に庶民まである程度教養が行き渡っている、「ちんふんかん」な「堅い事」も混ぜた方が受けると思われる。前掲の拙稿で証明したが、都の錦は自作の浮世草子において、実際には手近な和製類書―日本で編纂された類書―を利用しながら、見えない漢籍―『太平広記』『事林広記』『明皇雜録』―の書名を実見しているかのごとく、偽装する。作者が学識の誇示を行いたい場合、特に実態以上に偽装したい場合、類書はとて役に立つ書籍である。次に、利用法において『和漢乗合船』とは趣きが異なる事例を取りあげたい。

二 『好色敗毒散』

元禄十六年（一七〇三）刊行の夜食時分『好色敗毒散』には、『代醉編』の書名は見えない。その内容も、大坂の新町を中心に、京の鳥原、江戸の吉原に関する話を加え、遊里遊びに絡む好色譚十五編であることから、『代醉編』との関連は想定しがたい。

さて、『好色敗毒散』巻五の二「奇妙不思議」は、轆轤首の話などを含む。その冒頭に、

世にふしぎはないものといへども、むかしより和漢ともに、書にしるして然的たり、さすがの大聖人も鬼怪の理にいたりては、さばけかぬる事おほし、少と書物をのぞけば人を非に見て、我が智をふるまひ天地のあいだにあやしい事はないものと、つまんで取つたやうにいふもかたはらいたし、世間一般不有不無底の人馬ありと、邵康節・程伊川の間難落着せざる事、余冬序録にのせたり

という文章がある。^⑥『余冬序録』巻五十七に邵康節（宋の人、易に通じた人物）と程伊川（宋の大儒）に語って、「世間一般不有不無底の人馬あり」というと、伊川が「鞍轡の類何処より得来る」と反問したという。この逸話を右の文章は踏まえるのであろう。しかし、『好色敗毒散』で『余冬序録』がはっきりと利用された形跡が他に

ない。大部な『余冬序録』をわずか一節のみ用いたとは考えにくい。

い。

実は当該部分は、『代醉編』卷三十三に依拠したと考えることができる。

壁中金釵

『好色敗毒散』では、「鬼怪の理に至りては」云々と前置きするが、『代醉編』卷三十三の十五丁裏にも「鬼怪」という項目があり、その中に『余冬序録』からの引用があった。

昔有人遠行者取金釵藏壁中忘以語其妻既行而病以告其僕既而不死其妻聞空中声真其夫也曰吾已死以為不信金釵在某所取得之遂發喪其後夫婦反以為鬼程伊川曰鬼神之説只是道人心有感通……

鬼怪

右の文章には、ある男が遠方に出かけ死にかけた際、壁の中の金釵

阮宣子無鬼論謂今人或見死人為鬼其衣服与生時相似人死有鬼衣服亦有鬼……康節語伊川世間有一般不有不無底人馬程云載轡之類何処得来邵意則是以為有鬼程之所難者則亦是阮宣子衣服之疑雖大儒不能決 余冬序録

のことを妻に伝えておらず気にしていたが、妻は夫の声がして金釵の所在を知る話などが入っている。遠距離離間で精神が通じてしまう、心感通である。「心感通」は、『代醉編』にも『好色敗毒散』にも共通する。『好色敗毒散』の作者は『代醉編』を読み、「心感通」という部分に興味を抱き、それを発想の基にしながらも、新たに遊郭の場面に合わせて具体的な文章を創作したのである。

右の一致から『好色敗毒散』は『代醉編』卷三十三を直接見ていたと判断できる。このことが明確になったことで、同じ『好色敗毒散』卷五の二に見える文章も注目に値する。

さらに、『好色敗毒散』卷五の二には、次のような文章もある。

鳥原のさほ川は身は井筒屋にありながら、魂は伊勢の白子にかよひて、客に金子五十両もらうてかへりし事かくれなし、室の巴は筑紫の善通寺にすむ男をうらみて、生靈喚にくひつきてころせし事など、いふもおろかなり、これらは神心感通の理にてかくもあるべし

むかし新町に万世といふ端女郎、たぐひなき美女、何として下位にすまる、事と、夜見の諸人ふしぎはれざるに、尤の事なり、此の宿よ飛頭とて、俗にいふ轆轤首にて、朝込の床の内目ざめて見れば、首は髷をはなれて、ぞめきありき、あるいは鴨居のうへに完爾してゐる事、そのすさまじさ、いかな男も生きた心地はなかりしとぞ、惣じて飛頭鼻飲といふものは、湿火より出づる病ひなり、安南国には土地の風俗にて、此の類多し、我が朝

遠く離れたところから精神が通じる、不思議な現象を二つ述べている。さて、これを『代醉編』卷三十三の十九丁裏の項目と比較した

る病ひなり、安南国には土地の風俗にて、此の類多し、我が朝

にても折ふし此のさたあり、此のころも新町の大夫に、此の手の病あるよし、夜更人しづまりて、うるはしき御首ばかり、棚さがしに肉餅・辛皮の煮染などを、してやらるゝありさまを、食焼のかやが見付けての物がたり

輻首ならば、『代醉編』卷三十三の八丁裏に対応する項目がある。安南国の逸話の引用もあり、語順は異なるが近似した「鼻飲頭飛」の語句も見える。『代醉編』のこれもまた卷二十三であることを勘案すれば、『好色敗毒散』の作者がこの項目を直接目にしてきたことは確実である。

鼻飲頭飛

元詩人陳孚出使安南有紀事詩曰鼻飲……頭飛似輻蓋言土人有能鼻飲者有頭能夜飛於海食魚晝復歸身者……

右の夜中に頭だけ飛んで魚を食べるという一節を踏まえつつ、『好色敗毒散』は、遊郭の話らしく、

うるはしき御首ばかり、棚さがしに肉餅・辛皮の煮染などを、してやらるゝ、

と創り直したのであるう。

『好色敗毒散』は、『代醉編』（より具体的にいえば、卷三十三）を見ながら執筆している。その際、発想の基にしながら新たに文章を創っている。『好色敗毒散』には、『代醉編』の書名は見えず、か

つ遊郭を舞台に設定していることもあり、その利用が想像しにくい
が、しかし利用を確定し改めて検証してみれば、細かい文辞にまで
創作の跡がうかがえるのである。

類書の利用法は二様ではない。その点にも配慮して検証すること
が大切であろう。

展 望

さて、『代醉編』から近世小説への直接的影響は、今後もつと見
出せるであろう。それに加えて副次的な伝播も発見されることが推
測される。

たとえば、江島其磧『武道近江八景』（享保四年〔二七一九〕刊）
卷一の三に、

法印さればをのくのやうに世に不思議はないもの、やうに申
さるゝ人もあれど、むかしより和漢ともに書にしろしての然た
り、さすがの大聖人も鬼怪の理に至りてはさばけかぬる事おほ
し、なま物じりの学問たてする若ひ者人を非に見て我が智をふ
るまひ、天地の問にあやしひ事はなき物と、つまんだやうにい
はるゝはかたはらいたし、世間一般不有無底人馬ありと、邵
康節程伊川の問難落着せざる事余冬序録にのせたれば、かまへ
て世にふしぎといふものはないなど、其身の武辺にほこりい

ひけすはひが事なり去年八月の始細川勝元殿の妾おでんといへるが轆轤首にて様々隠して療治せられぬれ共験なく、愚僧をたのみ来りしゆへ此たびのことく七日加持して早速本復させぬるが、是も飛頭鼻飲といふ病にて根本は湿火より出る煩ひにて安南国といふ国には土地の風俗にて此類ひおほし……

とある。^①「細川勝元殿の妾おでん」を療治したという法印の自慢話は、『一夜船』（正徳二年（一七一二）刊）より撰取された部分であるが、その前後の部分は細かい文辞の一致からして明らかに『好色敗毒散』を利用している。先に述べたごとく、該当部分は『代酔編』に依拠している。『武道近江八景』は『代酔編』の間接的影響を受けているといえる。このような事例もまだまだ出てくるであろう。

また、上田秋成や石川雅望の作品に『代酔編』影響は今のところ見出せない。しかし秋成『世間妾形氣』（明和三年（一七六六）刊）や雅望『飛驒匠物語』（文化五年（一八〇八）刊）は『和漢乗合船』の影響を受けていたことが既に指摘されている。^②したがって、秋成・雅望は『和漢乗合船』を読んでいる。『和漢乗合船』を介して『代酔編』収録のいくつの逸話は、秋成・雅望にまで伝わっている。近世小説と類書（および類書の性質を持つ注釈書なども含め）との関連は、量的にも質的にも、今後さらに追及されるべき課題では

ないだろうか。

注

- ① 和刻本漢籍隨筆集7『琅邪代醉編』（汲古書院 一九七三年）収録の影印本により、振り仮名・返り点は外した。
- ② 小池正胤・叢の会編『江戸の絵本Ⅰ』（国書刊行会 一九八七年）所収の影印により、適宜句点を施した。
- ③ 日本古典文学集成『南総里見八犬伝』（新潮社）により、振り仮名などは外した。以下の引用も同様の処置をした。
- ④ 木越治編叢書江戸文庫34『浮世草子怪談集』（国書刊行会 一九九四年）による。
- ⑤ 天理図書館蔵本による。
- ⑥ 新編日本古典文学全集『浮世草子集』（小学館）による。なお、特殊な読み方をする語句に関して、一部振り仮名を残した。
- ⑦ 『八文字屋本全集』（汲古書院）による。
- ⑧ 佐伯孝弘「お春の造型―『世間妾形氣』の二・…の三小考―」（『近世文学論叢』一九九三年）、および佐藤深雪『飛驒匠物語』私考』（『日本文学』一九九七年・〇月号）。